

日本の発見 私は考える

聞き手・東京新聞政治部 渡辺記者

筆頭副幹事長時代のもの。日本にはまだ新しい価値体系がなく、政治もいま苦悩中だが、平和の基礎はマイホーム主義から主張している。

基礎はマイホーム

戦後の日本で憂える点があるとしたら、なんですか？

「戦後日本の精神的な混乱は、なんといっても敗戦で価値体系が総くずれしたことによる。生命をささげても悔いがないという尊敬の対象が、戦前には天皇だとか、政府といったものでした。そうした戦前の権威が、すべてくずれ去った。占領当局者は、当時、日本古来の権威をすべて砕いてしまつことを指向していたのに、日本人の抵抗が意外なほど弱かった。それは、天皇にしても、ほかの権威にしても、国民にとっては与えられたものにすぎなかったからではないでしょうか。自分で思考し、血みどろになってたたかいたものではなかったんですね。従って、価値観が転倒すると、もうあと

は右往左往する以外になかったのです。そして戦後二十一年目の今日まで、いぜんとして新しい価値体系ができあがっていない。日本人はいま苦悶しているのです」

「いったい、日本には民主主義が定着するんでしょうか？」

「いまの時期で定着するかどうかを論じるのは、早いと私は思いますね。見ようによっては定着の方向にいっていると思えるし、望みがないといえはいえないこともない。民主主義を私たち日本人が経験してから、まだ日が浅すぎるのです。いませつかちな判決を出すのは危険です。私の感想ですか？ 私だったら、定着の方向に向かっているほうにかけますね。国会の混乱も、いろいろギクシヤクあつて、その中から少しずつ学び取り、前進があるのではないのでしょうか。どうも日本人は性急すぎますよ」

たとえば、この十年間をとって議会民主政治は少しでも成長したと思えますか？

「ぼくは前進していると思いますね。足どりは重いけど。国会で成立している案件の八割は与野党の共同修正、あるいは賛成によるものです」

量的にはそうでしょうが質的に問題がある。つまり、重要法案になるほど互いに非寛容になる……。

「そうです。政党というのは元来非寛容なものなんです。とくに社会党は労働組合政党なので、労組の権利をおかすものについては絶対反対せざるを得ない。そして大衆を動員、訓練するためにスローガンを使う。安保反対にしても論理の問題ではなく、運動の原理になってしまっている。だから折り合いがつかないんです。国会は与野党共通の広場なんだから、ぎりぎりまで話し合つてとにかく解決して儀式をするところです。問題が後に残らないようにしなければならぬ。その意味では、

いまの自民党はたしかにかたくなすぎるし、社会党もえこじにすぎるといえるでしょう。でもどちらも同じ土壌で同じメシを食って、同じ情操を持っているのです。不倶戴天（ふぐたいてん）ではない。新しい未来は開けますよ。いまその過程にあり、やはり苦悩している最中なのです」

日本にはたして民主主義が育つのでしょうか。一人一人が正しい判断力を持った市民社会などできるのでしょうか？

「マクロ的にみたら、そりゃあとらえどころのない不安にほくもかられます。でも、ぼくはこうした問題にたいして『日本人は……』という大きなとらえ方をしないようにしています。まず、自分から、個人から出発させるべきだと思うのです。だれでも、自分あるいは家庭にたいしては又キサシならない立ち場があり、責任を持っている。そこで自分をどうすべきか、そして地域社会の一員としてなにをなすべきか、と考える。その意味では、国民の一人一人がマイホームに埋没するのは尊いことだと思えますね、ぼくは。生活の真実の中から平和と繁栄を考えてこそ、本当の平和が生まれ、理想的な社会人、国民が生まれると、思います。よい意味でのエゴイズムに徹したらいいのです。……いま、日本人は家庭生活の中からいろいろ学びとろうとして苦しんでいる。日本人がかなでる音楽は一つのコーラスになっていますよ。ときどき不協和音がありますけどね。案外調和はとれているんじゃないでしょうか。それが一つのリズムにのるのは、大変むずかしいには違いないけれど、日本人はバカじゃない。必ずリズムを生み出し、りっぱな芸術をつくりますよ。ぼくは日本人を信じます。また、そう信じる気持ちが唯一の支えです。それがなくちゃ、政治家としても生きていかれませんよ」